

学級心理学をめぐる新しい課題

田中 祐次

(新潟大学教育人間科学部附属教育実践総合センター教育臨床研究部門)

日 時：平成 15 年 2 月 20 日 (木) 18:00~19:30

場 所：新潟大学工学部 103 講義室 (SCS 教室)

司会：新潟大学 松井賢二 (教育実践総合センター・助教授)

皆さん、こんばんは。新潟大学の松井です。本日はご参加いただきましてまことにありがとうございます。平成 14 年度最後の第 9 回目でございます。

すでにご案内申し上げましたように、新潟大学の教育実践総合センターの教授でいらっしゃいます田中祐次先生から、SCS における最終講義「学級心理学をめぐる新しい課題」ということでお話をいただくことになっております。どうぞよろしくご協力をお願いいたします。

それでは参加されている局の方、発言要求ボタンを押していただけますでしょうか。鳥取大学さん、信州大学さん、大阪教育大学さん、兵庫教育大学さん、奈良教育大学さん、そして今映っている上越教育大学さんということになるかと思います。

ありがとうございます。

それでは時間のほうもきていますので、早速講師の田中祐次先生にバトンタッチしたいと思います。

どうぞよろしくをお願いいたします。

講師：田中祐次教授

皆さんこんばんは。

昨年も「不登校を生まない学級経営」ということでコマいただいたんですが、今回は私がこの 3 月で定年退官ということで特別便宜を図っていただきました。ありがとうございました。

思い返しますと、私昭和 41 年に信州大学で初めて助手としてスタートを切って、何年になるんでしょうか。確か信州大学に教育工学センターができたときには少しお役に立ったと思うんですが、その当時は学校臨床ということにはなかったんです。でも臨床工学と名前をつければ教育工学センターの中にプレイルームだって作れるんじゃないかといって本当に作ったんですね。そんな冒険も思い出します。

新潟へ来まして、ちょうど 2 年たったとき教育実践総合センターができて、そちらへ配置換えになりました。行き着くほうへいったなという感じがしております。

今私は中学校にスクール・カウンセラーとして入ってカウンセリングをやっていますけれども、もともとは今日のテーマにありますように専門は学級集団の心理学で、いわゆるカウンセリングのような 1 対 1 の関係が専門ではありません。学級の中で不適応の子どもは学級の中で治すんだということ。これはもうご承知の方もいますが、学部時代からソシオメトリーの田中熊次郎先生について、いろいろ影響を受けたことから始まったわけです。その田中熊次郎先生はことして 93 歳におなりで、お正月にお会いしてまいりましたけれども、お元気でおられました。

田中熊次郎先生は最終的には創価大学におられましたけれども、いわゆる現役時代は東京教育大学の教育相談施設におられまして、不登校の子の治療などにあたっておられました。私も同じような道を歩めたらなあと思っていましたので、この 2 年間は私の本来やろうとしている世界に戻れたような感じがしております。

大変古い話題ですけれども、私がずっと一貫してやってきました「学級心理学」は「集団」という語を入れて「学級集団心理学」とした方がはっきりすると思います。学級というところはそもそも、フォーマルな組織としての側面と、集団というインフォーマルな二つの側面をもっております。したがって実践的には「学級心理学」というよりは「学級経営学」という方がいいかもしれません。しかし経営という言葉を使うと「組織」の経営というふうにつながります。他方、「集団」というと集団心理学という心理学があります。私はもともとは集団心理学を専攻しましたので、そういう意味では学級集団心理学というのが私の本来の領域ということになるかもしれません。しかし、あまり心理学だけにとらわれないで、かなり教育的な面にも首を突っ込んでおります。

きょうはそういう意味で私が学部時代、大学院時代をと

おしてこの領域に携わったころの話から、近未来に至る道筋を追ってみようかなと思っております。時間も限られておりますので前半はあっさりとおすませようと思っております。

早速入っていきます。まず学級心理学というのはどういう学問なのかということですが、集団心理学の教育への応用分野であるということです。戦後アメリカから社会心理学や集団心理学がどっと入ってきました。今日も古い本を少し持ってはきておりますけれども、その中にソシオメトリーというのも入っております、一世を風靡した感があります。日本が戦争でそういう分野に遅れをとっていたということもありまして、大変注目がいった領域で、早速教育の中にもそれが取り入れられたということです。

2のところに入りますが、学級心理学のこれまでの課題ということにしてありますが、集団心理学の初期にテーマになることがそのまま教育の世界にも持ち込まれたところのことです。まず一つはグループダイナミクス、これにすべて収まる問題でもあるんですけども、教育の現場に行ったときに、その中でも学級のまとまり（集団凝集性）とかリーダーシップとか、社会的な勢力、社会的な階層というような領域が取り上げられたわけです。しかし今考えますと、これは学問としては確かに対象になりましたし、研究される価値もあったと思いますが、果たして実際に学校での子どもたちのためになったのかどうかというのはちょっと疑問に思います。というのは、むしろ学術的に興味をもつ、また学者が学問的に関心を強くする、そういう知的な好奇心というものから入っていったといえるんじゃないだろうかということです。要するに少し強い言葉で言えば、学校の子どもたちは学者のそういう研究に利用されたということに、結果的になっているのではないかなと思います。

しかし、私としてはかつての恩師たちを批判するつもりもありません。実際私の恩師である田中熊次郎先生にしても、東京教育大学の長島貞夫先生にしましても、子どもに対する限りない愛情をもってこういう研究をなさっていました。当時すでにアクション・リサーチという言葉も入ってきてまして、田中熊次郎先生は、研究はすべて子どもの幸福のためにやるんだ、とはっきりおっしゃっておられました。

私もその影響を受け、少しでも子どもたちの役に立ちたいと思ってやってきたわけです。けれども、もとは学問としての興味からの科学的な研究対象ということだったと思います。

そうこうしているうちに集団心理学やグループダイナミクスからの課題に対して、教育の世界、特に学校現場からの実質的に意味をもった研究への要請が始まりました。いつごろからかということ、高度経済成長が始まってか

らということになるでしょうか。学校が非常に管理的になってきて、すべてが一斉に行われるという風潮がありました。トフラーの「第3の波」の中に、アメリカでもベルの音に合わせて学校に子どもたちが集まってくる様子が紹介されました。それはまさにオートメーション時代に労働者たちがベルトコンベアーの前に、ある時刻に一斉にきちんとそろわないとコンベアベルトが廻せないで、遅刻は絶対に許されない、遅刻をするとペナルティをとられるという工場を中心にした産業社会が急速に進んでくる、それに合わせて学校という所も、将来の労働者を育てるというためにベルを鳴らし、遅刻を許さない、お互いに協力する、逸脱者を許さない、そういう社会が進んでいたわけです。これが学校現場の教育実践の課題でした。

そういう中で始まった研究として出てきた問題というのがいわゆる「集団のまとまり」という問題です。これが「学級のまとまり」となり、これはグループダイナミクスのほうでいいますと「集団凝集性」でして、それが集団生産性にかかわるというわけです。また集団行動の形成を図ることも課題でした。これは成員の行動を斉一化させることで、右を向けといたらみんなが一斉に右を向く。そういうことがしっかりできる。そして教師の目標にきちっと協力して逸脱しない、そういう学級がまとまりの良い学級というふうにいわれてきたわけです。校長や担任教師の仕事はそういう「良い学校、学級」を作ることでした。それが児童生徒のためにもなると考えていたのだと思います。

またリーダーシップの問題もだんだんと現場へ入ってきました。現場の先生方はうちの学級にはリーダーがいないとか、彼はリーダーであとはフォロアーだとかいって、リーダーとフォロアーというのをはっきり区別しました。私もよく尋ねられたんですが、リーダーに共通する性格特性みたいなものはないのか、心理テストをやって、こいつはリーダーにしていいたいだろう、これはフォロアーだというように診断できないものかというわけです。それが特性論とか状況論とかに理論づけられたりしました。実際には当時すでにリーダーシップにつきましては状況の理論、状況とその特性との相互作用によってリーダーは決まるので、生まれつきリーダーになれる素質とかそういうものはないんだということは言われていたんですけども、現場ではまだまだそういう状況でした。また時代がそういうことを要求していたんだろうと思います。

リーダーシップ訓練という言葉も入ってきました。これは今でもありますけれども、当時のリーダーの概念はいわゆるリーダーというよりはボスというのが実際に教師が特定の子をリーダーにしたいと意図して教師の手伝いをさせたりして一生懸命リーダーに育てる、そういうことが

行われていました。三隅先生のPM理論も中間管理職の養成に使われていました。

一方、リーダーとフォロワーとの関係もそうですが、学級の中に階層ができてくことや勢力の強いものと弱いものができて、強いものにうまく支配をさせる術も研究課題として要請されたりしました。これらは学術的にはリーダー発生の問題とからめてコミュニケーション・ネットワークの問題に発展し、「集団構造」という言葉を生み出しました。

また勢力階層というようなとらえ方は今でも名残がありまして、現場へ行くと、特に中学校では先生方が、学級の中にそういう構造ができるのは当たり前だ。それは仕方がないとそのまま許しているんです。

そうこうしているうちにこれに対して社会情勢が変わり、新たな課題がいろいろと出てきました。3の「学級心理学の最近の課題」のところで出ている問題です。現在は大体こんな状態かなと捉えております。

学級というものの編成の仕方が最近変わってきております。「集団離れ」という言葉ももう10年以上前ですが出てきました。学校が管理主義的だという批判が出たのも、そういう中でいじめの問題が出てきたり、学校の中で校内暴力が発生したり、不登校も急速に増えてきました。それはなぜか。それは管理に対する子どもたちの反抗なんじゃないかととらえられました。そういうことをとおして教育者もいろいろ反省し、現場も非常に窮地に立たされたりして、あまり学者の言うことも信頼できないという風潮もあったかと思えますけれども、とにかくいろいろ苦労がここで出てきました。

学級というのは本来は学習者たちが集団を形成しながら学習し成長するところなんです。最近では学校の教師たちの連携や協力の体制が整ってきて、特に学級王国というような姿はほとんど解消しています。2クラスが一緒になって授業をやったり、ティーム・ティーチングも10年ほど前から入ってきておりますし、決して学級だけに子どもを囲い込むような体制はとっていません。そういう意味では本来の学習者集団、しかも柔軟性のある構成、ある目的に応じてメンバーが変わるような編成の仕方も認められるようになってきています。そうなりますと、学級同士も平等で対等な人間関係の場ということになります。決して学級をまとめてクラス対抗試合に強くなるということだけではなくて、ある目標に向かってみんなで汗を流すということももちろん、社会的な総合活動を活発にさせ、そしてお互いに体験を共有し合うということをおして一体感を味わうとか、集団の楽しさを味わうとか、そこで社会的な自己高揚感を味わうとか、個の社会的成長にどれだけ寄与できる場にするかが目標になるということがだんだんと見

えてまいります。

特に心理的相互作用という側面から見ていきますと、勢力の研究と先ほど申し上げましたけれども、勢力に階層ができてしまい、それをそのままにしておくというのは今考えますと、今でもそういう見方をされる先生がおられると申しましたけれども、本当におかしいんですね。確かに勉強ができる子とできない子はいるかもしれませんが、しかし、人間として価値の低い子、高い子ということはありません。そういう面ではみんな対等です。また人間として対等であるということの中にはチャンスも対等でなければならぬということなんです。特定の子が階層的に上のほうにいて、いつもいるんないい役割が回って来て成長にとって有利ということではなくて、クラスの全員に等しくチャンスが与えられなければなりません。

そういう立場から集団を心理的相互作用の場と見なした場合、問題になるのがそのネットワークの不均一性すなわち集団の偏りです。実はソシオメトリーはこれを非常に的確に明らかにしてくれるのです。簡単な言い方でいってしまいますと、誤解を招きやすい言葉ですが、好かれる子と好かれない子がいるということです。ソシオメトリック・テストはそういう好かれている子、好かれてない子をはっきりさせて、差別を助長するんだという批判がありました。これは大変な誤解で私も大変苦労しました。決してそういうことではなくて、好かれるか嫌われるかについてもその学級の集団規範が関与しており、その集団規範の形成や集団雰囲気形成には教師の指導が関係しているのです。また、ある子にだけチャンスが集中してしまったり、ある子が社会的なチャンスからこぼれてしまったりするような、そういう状況をそのままにしておくことは許されません。実際、子どもの集団というのは放っておくと必ず偏りが出るんですね。その偏りをそのままにしておかないために、ソシオメトリック・テストのようなものが活用されたわけです。そのことは今では学級集団のアセスメントの上からも当たり前のように重要になっていると思います。

いずれにしてもソシオメトリック・テストは誤解されたままですけれども、今は学級の中で取り残されている子、特に不登校のために学校へ来ない子というのはどうしても取り残されやすいのですが、しかし、原則、学級から、どうせ来ないんだからいいやというやり方、扱い方は絶対許されていません。どんな子も学校へ来る、来ないにかかわらず、学級の一員として位置づけられていなければならないというわけです。

4番目、現在の課題としては、学級は社会的な学習の場、社会性を身につけるという意味です。特に最近少子化の中で子どもが社会的に訓練を受けるというか、社会的にもま

れる場が少なくなってきました。家庭の中でも兄弟が少なかったり、また核家族化したりしていますので、家庭によってそれぞれ違った個性があります。そういう背景をもったまま学校へやってきます。ですから、むしろ学校という所でコンセンサスの得られるような社会性というものを身につけなければならないのです。かつてのリーダーシップ訓練は今はロールプレイや構成的エンカウンターとして実践されるようになってきています。このような意味で学校はますます子どもの人間としての成長にとって大事な所になってくると思います。

ここに挙げた4つのことが現在まさに課題になっていると思います。しかし、実際にこの問題がどういうふうに関係しているのかということになりますと、その手立てを現場はまだ持っていないというのが実情ではないかと思えます。

ここまでは「起承転結」の「起承」のところ、次は「転」です。それでちょっと趣を変えて少し脱線話になるかもしれませんが、時間をいただきたいと思えます。

4番、「科学の進化とパラダイムシフト」です。今までの話と関係がないようにみえるかもしれませんが、しばらくご辛抱いただきたいと思えます。

「科学」も私は進化してきていると思えます。簡単にそれをたどってみようかと思えます。昔のことは私もよくわかりませんが、「科学前の段階」というのがあったのではないかと思えます。ピアジェという心理学者が、幼児期の自己中心性の中でそれを構成する一つでアニミズムというのを指摘しています。原始人がもっていた認識の方式、人間による自己中心的な世界の認識、しかしこれがやがてギリシャ時代に入りますと、アリストテレス的な対象の認識というようなやり方が出てきます。世界は木と土と空気と水でできているとか、そういう世界の「構成元素」に目が向くようになります。これはやはり科学的な思考の始まりじゃないかなというふうに思えます。そこには論理というものが採用されています。

対象を物質として見て、さらにそれが何でできているのかという根源的な構成物質への関心に進んだということです。すなわち存在しているもの（存在それ自体）に関心が向けられたということになると思えます。

次が科学第1レベルというふうに私が名づけたんですが、これは対象の客観的認識、いわゆる科学的認識、客観的とか主観的とかいわれる見方ですけれども、これはガリレイによって始められたと象徴的にいわれています。またこれはアインシュタインまで続いたと思えます。

現在、一般的に科学といわれた場合、この科学の概念がまだまだ根強く、中心的、ときには絶対的概念としてはびこっています。これはしかし基礎としては残りますが、進

化という点から見ると、決して前がなくなってしまうということではありません。この土台の上に次が成り立つという意味ではこれがあるのももちろんいいわけで、これがなくてはの上に来るものが来ることができません。ですからこれが遅れているとか、もうこんなのは古いからなくしていいんだという意味ではありません。これまでの科学の営みが次の科学の基礎になってくると思います。「蓄積された科学知」というふうにいえると思います。

しかし、これまでの科学の特徴は自他の分離です。私という人間と私ではない別の対象、相手が物であれば一番はっきりしていますが、その認識の方式が他者という人間に対しても適用されてしまったのです。マルチン・ブーバーの本に「我と汝」というのがあります。この世界は「我・それ」という関係と、「我・汝」という関係の持ち方の2種類になったというわけです。ブーバーは「我・汝」という関係のとり方が減っていると批判しているのです。相手が人間であるにもかかわらず「我・それ」という関係を構築してしまう。心身二元論というのもこの段階で出てきています。

ではこの次の進化の段階はどういう段階なのかというと、それが第2のレベルの段階です。これは私は20世紀の後半でここに到達したと思えますが、私がちょうど学生のころ、レヴィ・ストロースの構造主義とかマクルーハンの垂直思考と水平思考とかいろんな人が出てきました。当時は私もなんのこともよくわかりませんでした。最近、小泉首相が盛んに主張している構造改革は、その当時の構造主義に端を発しているのではないかと思えます。

要するに哲学者がやっていた構造主義という論理がいよいよ現実の分析に用いられ、人類が作ってきた構造そのものの変革が必要になってきたということなのでしょう。少し具体的にみますと、いろいろな科学によって得られた知識、その知識の体系といわれていたものが「知識の構造」というふうになってきました。これは別の言葉でいえば、対象間の関係性の問題です。こういう中でシステム科学も生まれてきたと思えます。

一方、新しく知識を獲得する手法として川喜田二郎先生のKJ法というのがありまして、今でもカード法というような形で続いています。フィールドで研究をするような場合、大変有効な方法とされています。断片的な資料を集めてそれを構造化していく。その中で新たな姿を、それまでではおもてからは見えなかった背後にある姿を見出すということです。他方、統計学の中では因子分析、多変量分析から因子構造を見つけるという技術もありますように、盛んに構造という言葉が使われるようになりました。ここで起きてきたのが私は第1のパラダイムの変化だろうと思えます。実際、パラダイムシフトという言葉が一世を風

靡したこともありましたが、これらはみな構造主義的な認識方法がもたらした成果なのです。

そこで第3のレベルになるのですが、これはすでに始まっていると私は思っています。先をいいますと、第4のレベルまで私は考えているわけですが、まずは第3のレベルです。それは存在の意味と認識の問題への関心です。これが現在進みつつある科学の状況ではないだろうかと思えます。人間それ自身と対象とのかわりへの関心ですね。物同士のかかわり、関係構造ではなくて、人間を主人公にしたまきにブーバーのいうすべての存在を我と汝という関係でもう一回結びつけ直そうという段階だと思います。科学者も例外ではありません。「私と対象」という「私」の関わり方の実態を自ら問いただす姿勢が問われるのです。

これはいわゆる生態学とか地球環境の問題、自分自身の命とともに人々の命や幸福に関わる問題です。人間は決して自分一人ではもちろん、人類だけでも生きていられないという生物循環の中にいます。これはシステム論的に説明がつくんですけども、そういう認識がようやく現実のものになってきたというわけです。この世にあるものはすべてお互いに関係しあっている、たとえ人間といえども、その関係の輪から脱出することはできない、みんながそういう関係を保ちながら共存している、そういう世界です。

ここでは、結局人間の心の持ち方が問われてきます。「我・それ」というような心の持ち方ではなくて、「我・汝」というような心の持ち方が必要になってきます。今盛んにそういう動きがあり、それを総称して現代を「心の時代」だというふうにもいわれるのでしょうか。

第1のレベルでアインシュタインまでと私申し上げたのは、アインシュタインはインドの詩人で哲学者のタゴールとの対話の中で、「私が死んでもお月様はちゃんとあるじゃないか。だからお月様は客観的な存在なんだ。私とか私の意識とかそういうものとは関係のないところに存在する対象なんだ」というふうにいるわけですけども、タゴールは「今あなたが見ているお月様はあなたのお月様。しかし私が見ているお月様は私のお月様だ」と反論したという有名な話があります。要するにアインシュタインは科学主義だったと思います。タゴールはお月様というものを自分の意識の中で捉えていたと思います。

私は物理学に大変興味をもちまして、心理学と物理学という論文を書きましたが、こういうのはどこも載せてくれませんので、紀要に書きました。かつてNHKでアインシュタインロマンという放送がありまして、それは私には大変刺激的でしたので関心をもったのですが、物理学を見ますと、量子力学はもうその第1の段階でここでいう第3のレベルにきているんですね。人間の意識が世界を作っ

ているんだというわけです。物理学の人たちがそこに到達しているのです。宇宙を作るのは人間の心だともいうんです。

科学の進歩によって宇宙も進歩してきている。そういわれるとそうなんです。科学が進歩すると宇宙もだんだん見えてくるんです。今ではすごい望遠鏡がありましてかつて見えなかったものも見えてくる。科学の進歩によって人間の見える世界が変わってくる。そうすると人間の意識も変わってくる。その変わった意識で宇宙を見る。そうすると宇宙がまた見えてくるということがあるわけです。確かに私が死んでも宇宙はちゃんとあるだろうと思うんですけども、しかし、やはりこの宇宙という名前をつけて見ているのは、人間が意識というものを持っているからなんです。その辺は私もまだよくわかりません。

第4のレベルになるわけですけども、次はそれでどこへ行くんだらうということになるわけですが、これもすでに始まっているんですね。人間存在の意味への振り返り。今盛んに歴史的に振り返るということをしています。考古学にしても非常に盛んですし、いろんな心理学やカウンセリングのワークショップの中でも必ずといっていいほど「振り返り」というのをやります。一時、メタ認知、自分が認識しているということを認識するという、自分とは何なのかということ、自分を客観的に見つめ直すという作業を人間は始めました。

今日も教育学関係の方で修士論文の審査があったんですけども、その方は現場の学校の先生方がもっと自分を省察する、振り返ってみる必要があるのではないかという立場から研究しているのですが、自分がどうしてこういうしゃべり方をし、子どもにこういう問いかけをしたのか、その根源にある自分というものをもち振り返る必要があるというわけです。教師の授業改善はそこから出発しなければいけないだっておっしゃっていました。

ここにいろいろ並べましたけれども、「気づき」という言葉もその中に入るかと思えます。省察、内省、振り返り、気づき、意識。心理学のほうでは意識というのはかなり古くからあるんですけども、たとえばジェームズの心理学がそうですが、心理学が科学的になるにしたがって、意識というものを排除したという経過もあります。

そこでちょっと皆さんにお見せしたいんですけども、カール・セーガンが書いた「惑星へ」という本の中に出てくるんですけど、宇宙探査器ボイジャーが太陽系の外に出て、そして太陽系を振り返った写真です。これは人類が人類を宇宙的規模で振り返った、地球ぐるみで振り返った最たるものだと思います。振り返りがここまでできている。今まで人類はまっしぐらに前へ前へ進んできたわけですけども、これがどういう意味をもつのかというのは私もまだわ

かりません。過去なんか振り返るなというふうにもよくいわれますので、過去を振り返るというのは意味があるのかなと思うんですけども、しかし、現実に今人類はそれをやっているんですね。やらざるをえなくなってきたということなんですか。

そして何を始めたかという、実践です。結局今までの科学というのは物事を客観的に見る。心理学でいいますと、ブラックボックスがあって、刺激に対して反応する。そういう人間の姿というのを心理学者は客観的な立場と称して、それを外から眺めて、こういう刺激がくるとこういう反応をするという図式で一生懸命観察していたわけです。しかし、ちょっと立ち止まって考えてみたら、それを客観的に称して観察している自分も人間だった、行為者だったと気づいたわけです。人を観察するということは本当にできるのだろうか。

実際、子どもたちの世界に入っていきますと、教師は子どもを観察する以前に子どもから観察されています。ですから、そういう意味ではもう対等なので、研究者と研究されるものという区別というものには存在してはいけないのではないだろうか、みんなが対等になって、そこでお互いにコラボレーションしていく。そういう科学が本当の科学なんではないだろうかということになります。

すなわち、それは研究者といえども人間であり、共に生きている生活者であるという認識です。では研究者は何をしたらいいか。何のために研究者というのがあるのか。それはお互いを幸福にするためということになるんじゃないかというわけです。

そこで実はアクション・リサーチが出てくるわけです。時間の関係で急ぎますけれども、ここでいう科学が求める知はいわゆる「科学知」ではなくて、「実践知」ということになります。これは私は第2のパラダイムシフトではないかというふうに思います。これまでの科学とはかなり違う科学になるのではないかと思います。

その一つは、もうかなり古いといえば古いんですが、ミハエル・エンデが語った「モモ」の世界ではないかと思うんですね。ミハエル・エンデは死ぬ前にエンデの遺言として、現在の資本主義のやり方での貨幣経済、これが世界を席卷しているわけですが、その見直しを提案しています。彼は地域貨幣というものをとりあげています。これはすでにある地域では実践されているわけですが、この地域貨幣という考え方はそのコミュニティの中で人々がお互いに奉仕しあい、貢献しあうなかでこそお互いに「ありがとう」「ありがとう」と言い合う関係ができ、そこで人々は確実な社会的な効力感というものを感じ合い、本当に人間の心のふれあいのあるコミュニティができるというものです。ミハエル・エンデはそういうことをと

おして、人間の心を取り戻さなければ人間の幸福はありえないのではないかとっているんだらうと思います。

最後になりますが、この科学の進化というものを今見てきたわけですが、これを根拠にこれからの学級心理学の課題を提案してみたいと思います。

いよいよ5の「学級心理学の実践課題」です。学者が研究し、また熱心な先生方が学者のまねをして研究する、そういう研究はもういいんじゃないかというわけです。すなわち、ここでは6つほど挙げましたけれども、まず、集団活動を楽しいものと感じられるようにさせる、それが学級心理学の課題ではないだろうかということです。次にアサーション訓練の場、これは言いたいことが言える学級ということです。ある強い子がいて、その子が発言するとみんなが黙っちゃうんだそうです。友達が大きな声で発言したのか、また学級のために思って多分言ったんでしょうけれども、「お前が入ると負けるから遠慮してくれるといいんだけどなあ」みたいなことを言う。いわれた生徒はそれっきり不登校になってしまったのです。しかし、だんだん大人になって、そのときの悔しさをそれから3年もたってやっと言うようになりました。

しかし、それがもしそのときに、「何言ってるんだい」と言えたら、その子は不登校にならなくてすんだわけですね。そういう子がいるのは自然な姿としては仕方がないことですが、そういう子がいるんだということを教師はやっぱりきちっと認識してないといけないのです。とかく教師は元気のいい子が好きですから、そっちにばかり目が向いてしまうんじゃないかと思うんですけども、その陰で心に傷を負う子がいるということをしつかりと認識していないといけないのではないかと思います。

そういう意味では学級経営とカウンセリングをやっているんですけども、実は私はカウンセリングをやる以前に、学級の経営の中で防いでほしいと思っているのです。一人ひとりの子どもが傷ついたままで取り残されるような集団にしておかないでほしい。それを切に私としては望んでいるわけです。

スクール・カウンセラーになられるような方々がどれだけそういうことを考えてくださっているか、もしそういうことを考えていたとしても、学校へ行って学級の中まで入ることはなかなかできないだらうと思います。私は一昨年になりますけれども、カウンセリング学会で「学校カウンセラーの学級へのかかわり」というテーマで発表しました。学級へ入り込んで特活の時間をいただいて授業をやりました。このねらいはアサーションでした。2回ぐらいではその学級をアサーションのできるような学級にはもちろんできなかったわけですが、しかし、子どもの反応は大変よくて、一言で言えば「なんでも言える学級だった

らしいな」という感想が得られました。

次に気づきの訓練の場。自分が何をしているのか。それは集団というところで、他人の気持ちを考える、そうすることによって同時に自分も振り返ることができるようになるのです。ですから気づきを促すためには他人が必要なんです。そういう意味では学級というところは非常に有効な場だと思います。

自律性の訓練の場。自律性というのは自分を自由に解放するということです。家庭のしがらみとってはいけません、人間というのは因縁を背負っていたり、しがらみを身につけていたりするわけですけれども、そういう自分に気づけば自由になれるわけです。カウンセリングはそういうことを一つねらっているわけです。これもカウンセリングという状況に持ち込まなくても、学級の中で育てることはできるだろうと思っています。

5番目は、社会的自己効力感の獲得、この次には自尊感情というものもあるわけですが、自分がやはり人のためになっているんだという実感を得たとき、人は自信をもって生きていける、そういう体験をさせるのも学級だと思います。今、中学生でもアルバイトは許されていません。彼らは社会に出て大人の人から「ありがとう」と言われるチャンスがないんです。「ありがとう」と大人に言われるということは、それは将来の収入（経済的自立）につながっていくということでもあります。ですからもっと大人は子どもたちに「ありがとう」という言葉を使うべきだと思います。「ありがとう」の言葉を使うチャンスがなければ作ってやって、そして「ありがとう」と言う。これもやっぱり学校でやっていただきたいと思います。

そういうことをとおして、「僕はこの世の中へ生まれてきてよかったんだ」「私はこの世の中に望まれている人間なんだ」「私だって捨てたものじゃないんだぞ」という自尊心が得られるのではないかと思います。それがないまま生きていくというのは大変つらいことです。それは言い換えれば生まれてこなければよかったということになります。

そういう意味で自己実現の場に学級というところは活用できるわけです。まさに自己実現をさせてやれるところではないかと思います。実際の社会に出ていきますとそう甘くはありませんけれども、せめて学校の中でそういう感情を味あわせてやれたらいいんじゃないかなと思っております。

そういうことをとおしてみんなが幸せな実感を持てるようになったときに、初めてお互いを許しあい、認めあう、そして大切にしよう、そういう共生の社会が実現するのではないかと思います。今まさにそれが切実な人類の課題になってきていると思います。

以上で私の言いたいことは申し上げたわけですが、そういうことで最後にまとめて学級心理学というのはどういう心理学なのか、どうしたらいいのかということを書いておきました。

学級を、個を社会化する場ととらえます。社会化の方向は一つの価値をもっています。一つ申し忘れましたけれども、どういう社会を作ろうとしているのかということが、今まさに大人に課せられている課題ではないかなというふうに思います。そういう中でも学校の先生方はまさにそれを考えなければ、今日の教育に手が出ないはずで。

ぜひ皆さん、それぞれ違っていいと思うんですが、理想社会を描いていただきたいというふうに私は思っております。その理想社会を実現するために必要な力、それを得る、それが「生きる力」であり、そういうことのために社会化を目指すのが学級というところであり、それを効果的に達成することを目指して、集団心理学的な視点から学級を査定する。例えばいろいろアンケートをとって、子どもたちがどんな感じをもっているのか、そういうことを子どもたちからフィードバックしてもらおう。そしてその理想とする社会に対して、今この学級は何が足りないのか。何がまだ達成されていないのかを考える、そしてここに出てきた問題、それが実践課題となります。それをきちっと具体的に定めて、そしてそれを毎日の実践の中で解決していく手立てを考える。いろんな工夫をする。そこではアイデアマンも動員していいですし、いろんな人がまさに共同して知恵を出し合う。そういう意味で学者はいろんな情報をもっていますので活用できるのではないかと思います。それがこれからの学級経営のやり方です。

皆さんは私が脱線すると申し上げましたが、今その意味をおわかりいただけたかと思います。科学はそれ自体が絶対ではありません。科学は進化します。ですから決して硬く考えることはないと思います。人類の知恵の営みは本来柔軟です。知恵は本来自分という「個」を幸せにするために使われるものです。それでこそ「生きる力」になるのです。利己主義からは「自分」の幸せは実現しないということもきくと知るはずで。

私もやっとここまでできましたがまだまだ先が楽しみです。ですからそう簡単に死ぬわけにはいかないなというふうに思っておりますけれども、これから未来のある若い先生方、学生さんたちにはぜひ自信をもって毎日の実践に取り組んでいただければと思っております。

貴重な時間をいただきまして、好きなことを言わせていただきました。ありがとうございました。

—拍手—

司会：新潟大学 松井賢二

田中先生、どうもありがとうございます。

それではあと 20 分近くでございます。きょうは年度末のお忙しいところ、せっかくご参加いただいております。SCSにおきましてはたぶん田中先生とは今日が最後ということでございます。ぜひ全国の皆さまから、ご質問、ご意見をいただきたいと思ひます。

田中祐次先生は昨年度平成 13 年度に教育総合実践センターにこられて丸 2 年がたちました。教育臨床、SCS ももちろんそうでございますが、私もそういう中で研究室も隣になりまして、非常にお忙しい先生でいらっしゃるのです。毎日とはいきませんが、週に何回かお会いしながら進めてまいりました。今日のお話をお聞きしまして、先生は昭和 41 年、1966 年、今から 36、7 年前からずっと大学関係教職に携わって、また心理学者としてご研究されてこられたその奥の深さと、また幅の広さと両面を今日の 1 時間少しの間にまた改めて感じさせていただいているところでございます。

ぜひ皆さんからも質問でなくても、コメントがございましたら、せっかくご参加いただいておりますので一言でもいただけるとありがたいと思ひます。発言要求ボタンをお願いしたいと思ひます。いかがでしょうか。

兵庫教育大学 古川先生

兵庫教育大学の古川でございます。田中先生、ありがとうございます。ちょっと感想めいたことなんですけれども、教育臨床といいますとどうしても個人的なカウンセリングが非常に多く取り上げられます中で、そういう集団という形で学級を捉えていくというのは大変重要な視点ではないかと思ひました。

次は質問なんですけれども、大変啓発される部分もあったんですけれども、私が勉強不足で今ひとつわからなかったのが、5 番目の科学の進化から見たこれからの課題についてです。この実践的な課題が出てくるのは、その上にあります「6) 科学第 4 レベル段階」に達したときのいわゆる実践知といいますか、お互いを幸福にするような実践的な研究が必要ということで出てきたんでしょうか。それともその前に書かれている自己への振り返りとか、そのあたりの関係もあるのでしょうか。そのあたりの関係がいま一つよくわからなかったということ。

6 番目の結論のところ、これも私まだ自分でもよくわからないんですが、まず分析をして課題を設定すると書かれていますが、分析する前にすでに問題が発生していないのか、こういうような学級にしたいなという目標があるのか、そして、どちらが先に出てくるのか、この 2 点をお伺いしたいと思ひます。

田中祐次教授

的確にお答えできるかどうか心配ですが、二つの質問は関連していると思ひます。と申しますのは、その科学第 4 のレベルということですが、これは進化というふうには捉えていますので、これまでの過程があつてのことなんです。結局、科学的にもものごとを見るということで人間の叡智がずいぶん活躍したわけなんです。しかし、本当に人間を幸せにしたのかということ振り返る中で、これは改めていうまでもなく人間は生まれてくると、どこかで自分は生まれてきてよかったんだろうか、どうして生まれてきたんだろうか、そういうことはみんな考えるんじゃないかと思ひますね。

幸いにしてゆとりができたからかもしれませんが、我々は自分を振り返る。そして自分は一体何をこの世の中で実現しようとしているのかということを考えるようになったんじゃないかと思ひます。

端的に申し上げますと、戦争のような状況の中ではそんなことを考えても始まらなかったし、考える以前に機械的に振り分けられて、そして戦地に連れて行かれて、死ぬのは当たり前だと言われていました。そういう中で最近だんだんわかってきていますけれども、みんな悩みながら死んでいったのです。少なくともそうはなりたくないという人間の願望も、これは贅沢なゆとりの中で生まれてきたんだろうというふうには思ひますし、必然的にそれもあつたと思ひます。

実際、科学の成果を見ますと、確かに我々いろんな便利なものも与えてはくれましたけれども、しかし、少子化の一つの理由として今の若い人たちがあまり子どもを作らないということがあります。それは先の見えない不安な時代にわが子を残していく。それに対して不安に思ひます。本当はそれでは困るわけですが、そういうようなこともあるぐらい、依然として人間はまだ幸せになってはいない。誰もみんな損はしたくないし、少しでもいい生活をしたと思ひているわけです。私は人権教育に関してときどき話をさせられたりするんですが、こんなことを今から聞いたらぶん殴られるかもしれないけれども、と言ひながら、「人権って何でしょうか」と聞かれますね。

私の中には一つ答えがありまして、これは生まれてきてよかったと思ひえる権利だと捉えています。そういう言い方をします。それはみんな同じように思ひている。それに対して、私は学者の端くれとして思ひますけれども、科学はどれだけこれにこたえてきたんだろうかということを感じてしまうわけです。

そこで私ばかりではなく、科学者に対する要求が今出てきていますね。大学も改革の中で地域貢献ということを盛んに言ひていますが、私からすると、じゃあ今まで何も考えていなかったのか。大学はそのためにあつたんじ

やないかと思うわけですが、今改めてそういうことを言っているような有様です。

そして2番目のご質問ですが、結局そうなったときに、じゃあ幸せって何だろう、どうなったときに幸せなんだろう、どうなったときに人間は満足するんだろうかという、結局目標の問題が先にあると思います。人間は自律して、セルフコントロールして、そして自由になって、これがまず基本的な人権の問題でもあるわけですが、そこでじゃあ、どうなりたいかという、これは一人ひとりが許されている願望だと思います。

ですから教師は一人ひとりの願望を、これは一気に実現することは難しいわけですが、それをまとめていくということは避けられないと思うわけです。その中で子どもたちの欲求を中心に、教師もそこに加わって、じゃあどういう世界にしようか、このクラスをどういう学級にしたらいいかということをもまず考えることだと思います。

その目標が決まったときに、ではそのためには何が必要なのか、ということを検討しなければなりません。その目的を実現するための問題点、障害になっているものを明らかにする。それがここでいう、「学級を分析し」という、舌足らずかもしれませんが、先ほど申し上げましたけれども、実態を調査したり、みんなで考えてお互いに見つめ直したり、そういうことをとおして問題を明らかにして、その問題をどうすれば解決できるのかということに知恵と工夫を出してみんなでやってみるという、そういうつながりなんですけれども。ちょっと無理がありますでしょうか。「問題」を教師が勝手に「問題だ」と決め付けるのではなく「何が問題なのか」ということもみんなで考えるのです。

兵庫教育大学 古川先生

明確にお答えいただいて、かなり私の中でクリアになりました。いろんなカウンセリング技法とか教育技法がありますけれども、それはどういうふうにしたいかというのがないという意味というのがよくわかりました。どうもありがとうございました。

大阪教育大学 戸田先生

田中先生ありがとうございます。大阪教育大学の戸田でございます。今は鳥取におります。お願いなんですけれども、先生が今日お話いただいた内容を詳しく書いていただいている文献をメールか何かで教えていただけたらうれしいというのが1点と、ソシオメトリーについてのさまざまな誤解があるというお話をいただきましたけれども、このあたりもぜひ詳しく知りたいなと思います。教えていただければと思います。この時間の中では難しいかもしれませんが、メールなり論文なりで教えていただければと思います。お願いします。

田中祐次教授

やっと退職になりまして、少し自由な時間が取れるかなと、それを楽しみにしてまして、今日のをそのまま詳しく書いていつかまとめるつもりでおります。でも近いところで退官記念に今まで書いたものの中から少し抜粋して論集を作りましたので、それはお送りできると思います。

ソシオメトリーについてもその論集の中にありますので、ご覧いただければと思います。ご質問と関係のないことなんですが、一つ補足みたいに聞いていただきたいんですが、カウンセリングですが、私はこのごろ、新しいわけではないんですが、グループアプローチの手法、いわゆるグループカウンセリングの可能性に注目しております。アメリカあたりの研究には、がん患者の中でグループカウンセリングを受けた者は延命率が高いという結果を出しているのがあるやに聞いております。理由はどうか分かりませんが、これからのカウンセラーの教育の中で、グループというものの効果を活用したカウンセリングをぜひ皆さんに学んでいただきたいなと思っております。一つ加えさせていただきます。

司会：新潟大学 松井賢二

ありがとうございます。せっかくですので、最後にSCSを今日視聴してくださっている皆さん、若い人も大勢いると思うんですね。現職の先生をはじめ学部の子学生さん、大学院生の方もいらっしゃると思います。私もその若いほうなかもしれませんけれども、若手にエールを一言最後にいただくとありがたいなと思います。田中先生、一言お願いいたします。

田中祐次教授

私が初めて学会へ出たころは女性の人が本当に少なかったです。今でも私の年代の方というのはそういないと思います。しかし、最近学会へ行きますと、ほとんど女性に占領されているという感じですね。これはすばらしいことだというふうに思います。また一方で、会員の数もうんと増えています。

心理学は本当にこれから大事な学問になると思います。その際、誰もが実はそうなんです、最初に心理学に取り付くきっかけというのはかなり実践的なんです。例えば自分の問題で悩んで心理学を勉強するというのも私の仲間にもたくさんおります。やはりそれはとても大事だと思いますが、学者を養成するというのが主旨でしたのでこれまではあまり歓迎されませんでした。

しかし、これからはそういうふうには硬く考える必要はありません。実践的な心理学をぜひうんと学んで、隣にいる人を幸せにできる心理学を学んでいただきたいと思っております。ぜひそういう方向で頑張ってくださいと思います。これから未来があって本当にうらやましいです。どうも今

日はいい時間を与えていただきまして感謝しております。
ありがとうございました。

資料 (当日配布されたレジュメ)

平成15年2月20日

SCS 教育臨床講義 (新潟大学担当)

学級心理学をめぐる新しい課題

教育実践総合センター 田中祐次

- 1 学級心理学とは
 集団心理学の教育への応用分野
- 2 学級心理学のこれまでの課題
 - 1) グループダイナミクス
 集団標準の形成
 集団雰囲気、モラル (morale)
 集団凝集性と集団生産性
 - 2) 学級のまとめり
 集団凝集性
 集団行動の形成
 協力行動
 成員の斉一行動
 - 3) リーダーシップ
 リーダーとフォロアー
 特性論、状況論、相互作用論
 - 4) 社会的勢力、社会的階層
 勢力階層
 集団構造
- 3 学級心理学の最近の課題
 - 1) 学習者集団としてとらえる
 学級王国からの脱出
 - 2) 人間関係の場としてとらえる
 社会的相互活動の促進
 - 3) 心理的相互作用の場
 勢力分布の均一化、集団偏倚の是正
 - 4) 社会的学習の場 (社会性を身につける)
 適応促進
- 4 科学の進化とパラダイムシフト
 — 科学の進化—
 - 1) 前科学的段階 (アニミズムによる対象の認識)
 人間による自己中心の世界
 - 2) 原始科学的段階 (アリストテレス的対象認識)
 世界の構成元素
- 根源的物质への関心
 「存在」への関心
- 3) 科学第1レベル段階 (対象の客観的認識)
 自他の分離、心身二元論
 ガリレオからアインシュタインまで
 蓄積された科学の知
- 4) 科学第2レベル段階
 (対象の構造的認識—20世紀の成果)
 構造主義
 対象間の関係性への関心
 システム科学
 KJ法の流行
 第1のパラダイム転換
- 5) 科学第3レベル段階
 (「存在」の意味認識—一部で依然進行中)
 人間と対象との関わりへの関心
 人間の対象への影響力 (関わりの影響)
 心 (意識) の働き
 アインシュタインとタゴールの対話
 量子力学の世界
- 6) 科学第4レベル段階
 (「自己存在」へ認識—近未来的展望の科学)
 人間存在の意味への振り返り
 日常的行為への振り返りと気づき
 省察、内省、意識、メタ認知
 反省的实践
 実践科学、アクションリサーチ
 人が望む世界の実現
 宇宙の世界における人間の責任
 「実践知」の必要性
 第2のパラダイム転換
 ミハエル・エンゲ「モモ」の世界への回帰
- 5 「科学の進化」から見たこれからの課題
 学級心理学の実践課題
 - 1) 集団活動を楽しいものと感じさせる場
 - 2) アサーション訓練の場
 - 3) 気づきの訓練の場
 - 4) 自律性訓練の場
 - 5) 自己効力感の獲得、自己実現の場
- 6 結論としての学級心理学の新しい定義「学級を個の社会化する場としてとらえ、これを効果的に達成する事を目的とし、集団心理学的観点から学級を分析し、課題を設定して、その解決のために工夫を重ねる教育実践をいう。」